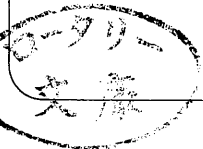


留学生援助の意義



このパンフレットは第二六六地区米山記念奨学会委員会から各クラブに配布されたテープを活字化したもので、講演者は財団法人ロータリー米山記念奨学会常務理事増田房二氏（京都山科）であります。ご一読下されば幸甚に存じます。

昭和五十三年十一月

吹田ロータリークラブ

米山記念奨学会委員会

星に向って車をつなぎ続けよう

私は、財団法人ロータリー米山記念奨学会の常務理事を仰せつかりまして、その運営のお手伝いをさせていただいております、京都山科クラブの増田でございます。

本日は真に僭越ではございますが、米山奨学事業に関連をいたしまして、留学生援助の意義について、私の考えを少しばかり述べさせていただきます。日本のロータリーが、世界に誇る国際奨学事業へ皆様の一層のご協力を、お願い致しますと存じます。

第一次世界大戦中に、ロータリーが戦災地の復興とか、難民の救済とか、傷病兵の慰問というような事業に乗出すことになりました。新しく国際奉仕という分野が開かれましたが、ロータリー運動の国境を越えた奉仕活動が、国際間の理解と親善に大きく貢献することができるといふ自覚が生まれましたことは、ロータリー発展史の上で新紀元を画するものであったと言われております。もともとロータリー運動というものは、人間社会に存在する色々な主義・主張の対立を排し、人間を人間として結びつけようとするものでございますから、この理想が国際レベルで追求されることによって、究極的には戦争防止につながるべきものであると考えるものでございます。ところが、現実にはロータリー誕生以来七十有余年を経過して、世界の三分の一の人々はロータリーを受け入れようとしないう体制の下にあります。ま

た一九二二年にロサンゼルス大会で、ロータリーの綱領の中に、国際奉仕の項目が明文化して設けられてからもすでに五十余年を経過致しましたが、この地球上にはロータリーの理想にもかかわらず、しばしば悲惨な戦争や暴力が繰返されまして、今や私共はロータリーの精神運動に加わりながらも、核の破壊力や武力に頼らなければ、人類社会で戦争や暴力を抑止する手段を見出すことができないかの如き感に襲われますことは、真に残念と言わざるを得ません。

「私どもは、人類に平和と幸福をもたらす役割を、ロータリーに多く期待することができないのであろうか。」ふと、そんな不安にかられることすらあります。

しかしそうした時に、私はあのポール・ハリスの残した言葉を思うのでございます。

彼はこう言っております。

『ロータリアンは、むしろ星に向って車をつなぎ続けるであろう。星とは、純粹・理想主義の事である。これに向って誰か高く登りうるものがあるかもしれないのだ。』かように申しております。

真に理想と現実との隔たりは大きなものがありますが、だからといって我々は理想の灯を消してはならない。人類の平和と幸福は、破壊力の脅迫や、自由の抑圧によって永続的に確保できるものではなくて、人間の英知と愛こそが、ゆるぎない平和と幸福に我々を導いてであり、ロータリーの奉仕の理想であると存じます。

一九〇五年に、わずか四人の人達の胸にもされた理想の灯は、今や七十八万人の人々の胸にもされております。

この灯を五倍、十倍、二十倍と、たゆみなく増やしてゆくことが、人類の平和と幸福という悲願に一步ずつでも近づくことになるのであるならば、私どもの奉仕がたとえささやかなものであっても、くじけることなくこれを世界に広めるために、我々は努力を続けなければならぬと思います。

この意味におきまして、ロータリーの数々のりっぱな国際奉仕活動は、私どもに未来への大きな希望を与えてくれますが、とりわけ私は日本のロータリーが輝かしい実績をあげて、すばらしい貢献をしております米山財団の国際奨学事業を、すぐれた世界理解活動の一つとして、高く評価いたしましたして、その一層の推進を計りたいと考えておるものでございます。

留 学 は 文 化 交 流 の 基 本

日本の国際的地位の著しい向上にとまいませんして、世界から日本に寄せられる期待が極め

て大きなものになって参りました。反面、日本が世界に与える摩擦もまた深刻に、問題視しなければならなくなったことは、最近の幾多の事例が如実にこれを示しております。日本が世界の進歩と調和に貢献するためには、まず日本人が世界を正しく理解すると共に、世界の人々から、日本が正しく理解をされるといふ事が先決でございます。

こうした日本と諸外国との相互理解と、文化交流の担い手となるのが、すなわち奨学生・留学生でございます。世界各国から日本へ来ている多数の留学生は、日本の学問と文化をそれぞれの故国に持ち帰りまして、やがては、その国の社会で活躍をする未来の指導者達でございます。しかも彼らは、一方的に日本から学ぶばかりでなく、日本に対して、彼らの文化や民族性の紹介をする文化使節的な役割も果しておるのでございます。なるほど日本は、今や経済力においても、文化の高さにおいても、世界のトップレベルにあって、日本人の海外活躍も極めて活発になっておりますが、まだまだ日本人にとって身近かに世界を知り、世界に日本を知らしめるチャンスは少ないといわざるを得ません。この意味におきまして、在日留学生は日本の中にある世界として、国民外交上からも貴重な存在といふべきでございます。米山奨学事業は、御承知のごとく海外から我が国へ留学する留学生諸君に学資を援助する日本のロータリー独特の事業でございますが、そもそも留学という人間交流は、もっとも基

本的、かつ長期的な国際文化交流の一つの形態として、国際間の相互理解を深め、世界平和の実現をめざすものでございます。しかしながら、ここでも理想と現実の間には、なかなか難しい問題を包蔵しております。たとえば、日本に来ている留学生のすべてが、親日家になることを期待できるかという問題がありますが、これは残念ながら難しいことでございます。留学は当然ながら学問を目的としておりますが、同時に政治や思想と深い関わりがありまして、これらと無縁ではあり得ません。

しかも学問というものは、現在与えられているものへの批判、さらにはその否定によって、より高く、より深く進歩・発展をしていくという、力学的要素を本来もっております。

だから時には、自分の恩師の学説に反し、それを乗り越えて、新しい学説を打ち立てるといふ例も学界には多々あると承わっております。この意味におきまして留学は、批判的文化交流であるとも言われているのであります。だから若い留学生が、日本や日本人を、批判的に見ることも当然ありましようし、残念なことながら、日本人社会の閉鎖性なども相俟ちまして、一部留学生の間には反日感情さえ生まれていることも否定できません。歴史に例を求めれば、抗日運動のリーダーの中にも、かつて日本へ留学をした経験者があったと言ふことも事実でございます。それならば留学生の援助は、あまり意味のないことと言ふべきかと

申しますと、決してそうではないと私は思います。

私達は留学生のすべてが、親日家になることは期待できなくても、彼らがすべて知日家になることは期待できます。

むつかしい政治問題は別にして、彼らに真の日本人の心を知らしめることはできるはずでございます。しかしそれにはまず日本人自身が、彼らの心を理解することこそが先決であって、こちらが彼らを理解しようとしないうで、彼らにこちらを理解せよというのは、手前勝手な註文というべきでございます。

留学生の援助は、一人でも多くの親日家を生むことを勿論期待いたしますが、大切なことは我々日本人が彼らを通じて、彼らの故国を理解し、彼らの文化を理解し、彼らの民族性を理解し、そうして彼らの生の対日感情を理解する、そういう努力の中で、真の意味の知日家を一人でも多く増やして、それら知日家の中から、将来の親日家を一人でも多く期待をするという、そういう持続的な相互理解の道を歩むことが大切でございます。留学生が一方的に日本で学習をするだけではなくて、日本人もまた留学生から多くを習ふという交流の点にこそ、留学生援助の大きな意義があると思うのでございます。だから留学生に対する援助には、決して思恵的な気持ちをもってはならない。また速効薬的な期待があってはならない。

勇気と忍耐をもって、善意と愛情をもって、じっくりと取り組むべき文化的な、そうして歴史的な事業であると信ずるものでございます。

孤独な思いの留学生に暖かい理解を

しかしながら、明治以来今日までの外国人留学生の歴史を見ますと、日本人の彼らに対する無理解が彼らの対日感情にいかに大きな影響を与えておるかを、しみじみと考えさせられるような事例があるのでございます。その一例を御紹介いたしますと、日本の留学生史上有名な、清国留学生陳天華の自殺事件というのがあります。

一九〇五年すなわち明治三八年は、アメリカでロータリーが生まれた年でございますが、日本では日露戦争の大勝利で国中が興奮にわきかえった年でもございました。その年の夏八月に、東京において中国革命同盟会というものが結成をされまして、あの有名な孫文が総理に選ばれました。そしてその頃の在日清国留学生と清朝政府との対立は、しだいに決定的なものになりつつありましたが、ついに清国政府から日本政府に対しまして、これらの革命的留学生の取締まりを強く要求してまいりました。そこでその年の十一月に、文部省は清国留学生取締まり規則を制定するに至ったのでございます。当然ながら各学校に学んでおりました留学生の間に、規則反対運動が急速に拡大いたしましたして、三〇〇名を越える学生が抗議声

明を発表して、十二月六日から一斉にストライキにはいることになりました。ところが十二月九日の午前一時ごろに、東京の大森海岸に三十才前後の洋服姿の男の死体が漂着いたしました。検死の結果この溺死体の主は、名前を陳天華という法政大学速成科に学ぶ清国留学生で、孫文の片腕ともいわれる中国革命同盟会の書記であり、またその機関紙の編集者でもあったのでございます。このような革命の闘士が、どうして急に死を選ぶにいたったのか。絶命書と称する彼の遺書には、留学生取締まり規則を強く批判しながらも、その直接の死の動機が日本の新聞の留学生に浴びせた、心なき侮蔑の言葉に対する死の抗議であったことを述べておったのでございます。当時の各新聞が、学生ストライキは『烏合の衆』とあざけり、ことにある新聞は「これは清国人の特有性なる放縦卑劣の意志より出で、団結もまた頗る薄弱なり。」と誹ったのでございますが、この放縦卑劣という屈辱の四つの文字を、永久に清国人の心に刻みつけるために、自分は東海に身を投ずるのだと書いてあったのでございます。決して陳天華は清国留学生取締まり規則に、抗議をして死んだではありません。放縦卑劣という四つの活字に対して、死をもってその怒りと悲しみを訴えたのでございます。この文字の国の清国留学生の死の抗議は、その政治的な是非の論は別といたしまして、他国人の無理解と心ない言葉の表現が、どれほど留学生の心に深い傷をおわせるものであるかを教える、

歴史の貴重な教訓であったと思います。

一方またこういう事例もございます。

奈良ロータリークラブの御世話になって、奈良女子大学の大学院で勉強をしておりました韓国女子留学生は、ある日急に歯が痛みだしました、ところが歯の治療は大変お金がかかると聞いていたので、ひどく心配をしながらも、しんぼうできなくて学校の近くの病院にかけつけました。幸いにして虫歯ではなかったので、暫らく治療に通院することになりましたが、その若いお医者さんが、日本国際教育協会へ手紙を出して、医療費の補助をうけるための手続きをくわしく調べて、必要な証明書を作ってくれました。そうして申すには「お金のことなんか、あなたは心配しないでよろしいから、いつでもおいでなさい。留学は大変でしょうが、頑張って勉強して下さい。」と励げましてくれました。彼女は申しました。「このような親切にあうと昔日本と韓国の間にあった悪い感情などすっかり消えてしまうのを感じる。またカウンセラーの暖かいおもてなしにあずかって、家族的な雰囲気を味わうことができ、この年はいろいろな親切のおかげで楽しく生き甲斐を覚える一年であった。」と彼女はそのレポートに書いておるのでございます。

日本へ来ている留学生、ことに私費留学生を取り巻く環境は、精神的にも物質的にもただ

ひたすら勉強にいそむことを可能にするような、そういう安定したものではございません。ですから彼らは真に心細い思いの毎日を過しながら、勉強を続けておるのでございます。従って彼らの接する日本人が、もし無関心な態度をとったり、心ない言葉を投げかけたりすれば、我々の想像以上に不愉快な印象を与えることとなりますし、またその反対に、ちょっとした親切や暖かい思いやりでも、思わざる喜びを与えることがあるのでございます。

こうして、いつも非常にナーバスな心理状態にあるのが彼らでございます。彼らに日本人々がどのようにかかわりをもつかということ、将来の国際親善の重要な問題点であると思うのでございます。この意味からして世界三十数ヶ国からの、特にその八〇%近くが東南アジアからの留学生に對しまして、物心両面にわたって、援助と激励を与えております米山奨学事業の意義が、いかに大きなものであるかは、ここに改めて強調するまでもございません。

私はかつて、たまたま米山奨学生になれなかった一留学生とかかわりをもつことによって、米山奨学制度のもつ意義と、問題点とに目を向けるようになったのでございます。それは数年前に私が推薦をして、米山奨学生に応募させたあるインドネシアの留学生が、残念ながら不合格となったのでございますが、その失望ぶりがいかにもかわいそうで、だんだん情が移ってしまったものですから、ほんのささやかながら、参考書代程度の援助をしてやることに

しました。しかしながらとても米山奨学金の肩代わりなどはできませんから、そのかわりに気が向いた時にはいつでもうちへ来て、家族といっしょに食事をするように申しました。そのうちに、休みには同じ国から来ている友達を連れてきまして、勝手にステレオを鳴らしたり、時には庭掃除や、修繕の手伝いをしたりして結構家族の一員のようになじんでくれました。

こうして一年ほどたちましたある日、彼の母親がたまたまキリスト教関係の用件で来日していたしまして、わざわざ私の家を訪ねてきました。そうして申すには、「日本に親類ができた、と息子から手紙をくれました。こうして初めて日本へ来てみますと、それは大変に遠い所ですが、貴方がいてくださいますので、私は安心ができます。どうかこれから息子のことを、よろしくお願い致します。」と目に涙を浮かべて申すのでございます。

今思い出してみても、このインドネシアの母親の目のどこにも、あのエコノミックアニマルと非難するインドネシア人の、まなざしはなかったと思うのでございます。私にとりましては勿論初めての経験でしたが、こんな些細なことがこんなにも喜ばれるものかと思ひまして、遙かな異国に息子を学ばせる母親の心情を察して、子を思う親心に変わりはないものだと胸を打たれたのでございます。

私はこの留学生を通じて色々なことを学びました。第一には、言語や、風俗や、習慣の全く違った遠い異国の土地に留学をしておる彼らは、我々が想像する以上に孤独な思いをしており、日常の家族的な雰囲気をもどきに望んでゐるか、そういう機会を与えられることをどんなに喜ぶものであるか、また時には自分の先生や友達の他にも、色々と打ち明けて話を聞いて貰える人が一人でもいるということ、本人はもちろんのこと故国の親、兄弟がどれほど安心するものであるかを。その意味で暖かい心のロータリアンが、彼らのカウンセラーになるという独特の米山奨学制度が、いかに留学生にとって貴重な制度であるかなどということとを、つくづくと感じたのでございます。

“されどお金なくして行なうこと能わず”

先進国日本が発展途上国のために、なすべきことはたくさんありますが、資本や技術の面にくらべて、人間に対する協力が著しく遅れております。しかも発展途上国は、かならずしも海の彼方にだけあるものではございません。こうした留学生を見ておりますと、現に日本列島の中にもあるという事を、米山奨学事業を通じて改めて考えたいと思つてございます。米山奨学金の支給は、過去二五年間に累計二二〇〇名を越えました。その中から一〇〇名以上の博士が出ていることを見れば、これがいかに輝かしい成果をあげている国際奨学事業

であるかがおわかりいただけると思ひます。しかしながらその反面、我國の全留学生の数から見れば米山奨学生の数は、まだまだ微々たるものと言わざるを得ません。現在日本で勉強中の留学生は全部で約六〇〇〇人、その内八〇%強が私費留学生で、数の上で圧倒的に私費留学生が多いのですが、こうした私費留学生に対する支援体制というものは、現在の日本では米山以外は、ほとんど見るべきものはありません。

国の事業としての対象は、全留学生の二〇%弱の国費留学生で、それ以外の私費留学生の多くは、来日と同時に孤立無縁に近い状態からスタートをしなければなりません。

こうした実情の中で私費留学生の約五%を対象としておる米山奨学事業は、それでも我国では殆んど唯一の国際奨学事業でありますから、今やこれを、もっともっと拡充することを考えなければならぬ使命があると思つてございます。

いわんやこの制度が一般の単なる奨学金支給制度とはちがって、その根底に日本のロータリアンの暖かい愛の心がこめられておるといふ一大特色をもつておるにおいでござい
ます。

この米山奨学制度は、かつて海外へ留学をする日本の青年や海外から日本へ留学するたくさんの方の外国人留学生に對しまして、その生涯を通じて本当に心のこもった、行届いた援助の

手をさしのべられましたところの、米山梅吉という、偉大な人格者の深い愛の心を受けついで、全国のロータリアンが、これを運営をしておるのでございます。米山記念という名称が、このことを端的に物語っておると思うのでございます。しかし如何に心がこもっても、結局は経済的な裏打ちがしっかりできなくては、成り立たないのがこの事業でもあります。あの川上肇博士の有名な言葉に「人はパンのみにて生くるものにあらず、されどパンなくして生きることは能わず。」というのがありますが、この言葉を借りて申せば、真に米山奨学事業は、「お金のみにて行なうものにあらず、されどお金なくして行なうことが能わず。」ということにもなるかと思えます。

米山財団はとかくご寄付の増額をお願いすることばかり多くて、真に恐縮ではございますが、このへんの事情に御理解を賜わりまして、昨年よりは今年、今年よりは来年と、米山財団の財政的な基盤が強化されて参りますように、格別のご協力をお願いを致す次第でございます。

これをおもちまして私のスピーチを、終らせていただきます。
有難うございました。